

第 17 回経済学史学会研究奨励賞受賞作講評

本賞 齋藤幸平『大洪水の前に——マルクスと惑星の物質代謝』

堀之内出版，2019 年，352 頁

本書は、カール・マルクスの経済学批判体系のもつ射程は、特にその物質代謝概念に関連づけると、従来考えられてきた次元を遥かに超えるものであると主張する意欲作である。本書は、3部7章から構成され、さらにマルクスのエコロジーをめぐる欧米の論争を俯瞰する「はじめに」と、かつて1960年代以降に唱えられていた〈マルクスへ帰れ〉を筆者なりに改めて主張する「あとがき」が付されている。

第1章では、初期マルクスの疎外論（人間主義）と後期マルクスとの間には断絶があるか否かという1960年代以後の論争に対して、初期マルクスの地代論の資本主義における人間の自然からの疎外というモチーフが、『資本論』にまで保持されていると主張される。第2章では、中期マルクスにおいては、そうした疎外論をさらに内容的に進化させた「物質代謝」概念が獲得され、マルクスの経済学批判は経済的形態規定の分析に留まらず、「素材的性質」の変容を考慮するものとなったと指摘される。その間、化学者リービヒのマルクス経済学批判体系への決定的影響が強調される。それとの関連で、第3章では、『資本論』の「労働日」、「大工業」の各章の記述が、弁証法的叙述からの逸脱ではなく、素材的世界の攪乱の具体的な論述であることが示される。そして、マルクスは「形態」と「素材」を弁証法的に関連づけ、価値増殖を優先する資本は自然を費用価格でしか認識しないため持続可能な経済を生みだすことができないことを明らかにしたのだ、といわれる。第4章では、マルクスは、1860年代前半には土地改良による生産性の改善に楽観的だったものの、60年代後半になると資本主義的な近代農業が人間と自然の物質代謝を攪乱するとの認識に転換したことを明らかにしている。第5章では、『資本論』出版後の1868年にリービヒとフラスの間で戦わされた論争とそれに対するマルクスの関心の深さが明らかにされ、従来看過されてきたマルクスの「意識的な『エコ社会主義的傾向』」が主張される。第6章では、マルクスの「利潤率の傾向的低下の法則」を批判する所説に対し、『要綱』における「資本の『生きた矛盾』」の記述の分析、『資本論』第3部草稿の再読、そしてマルクスの資本の弾力性概念の再興らによって反論が試みられ、そのうえで、価値増殖のための資本の運動が自然を変容させ、「環境危機」を発生させることが示される。第7章では、マルクスとエンゲルスの自然観に重大な相違はないとする従來說に対し、〈自然の支配〉に重きを置くエンゲルスと、物質代

謝論に基づくマルクスとの相違が強調され、そのことが彼らの間に「自由の国」についての理解の相違をもたらしていると主張される。

本書の優れた点は、第1に、これまで経済学史上、必ずしも注目されることのなかったマルクスの環境思想に注目し、MEGAを丹念に繙いていくことでその形成史を跡づけ、生産力至上主義的なマルクス像の根拠が極めて脆弱であることを示していることにある。それと関連して、第2に、エコロジーというテーマで、マルクスの初期から晩期までを中断なく描ききっていることにある。そして第3に、マルクスの経済学批判の内容を、素材と形態の両側面に着目するマルクスに固有の物質代謝概念に関連づけ、未完に終わった『資本論』第2部と第3部の内実に一定の見通しを与えつつ、「エコ社会主義」の展望を提示していることにある。総じて、古典研究のもつ現代的意義を改めてクローズアップしたという点で、文献考証による経済学史研究の学術的価値を高めた良作であるといえよう。

他方で、本書の中心的な概念である物質代謝論が、同時代人の間でどのように受容され、マルクスの思想とどのような関連にあるのか、過度にリービッチにのみ関連づけられている印象があるがゆえに、より深められる必要がある。わが国の玉野井芳郎のような先行研究への言及も欲しい。また、経済学における地代論と収穫逡減（リービッチはこれを批判しているようだ）との関係は、本書で語られるほど簡単ではないとの批判は当然あるだろう。そして、マルクスの物質代謝概念は、彼の資本循環概念と密接な関係にある以上、景気循環や恐慌といったより経済的な次元との関連づけがもっとなされて然るべきだという批判もある。さらにいうと、筆者は、マルクスのいわゆる抽象的な人間労働と価値との関連については、ややオーソドックスな理解（総計二命題の妥当性について肯定も否定もされていない）を前提に筆を進めていないか。そしてまた、人間と自然の統一の回復の主張や「エコ社会主義」の理念が、依然抽象的な説明に留まっている印象を与えるため、今後具体的に展開されることが望ましいということも指摘できよう。

上に述べたような課題はあるが、本書は若手研究者の経済学史研究として、本学会の奨励賞「本賞」に十分に値するものと言えよう。

2020年9月30日

経済学史学会
学会賞（研究奨励賞）審査委員会